

久留米教区

親鸞聖人入門講座

テキスト

— 出 遇 い —

私たちの宗旨は浄土真宗です

- 【本尊】 …阿弥陀如来
- 【正依の経典】 …仏説無量寿経（大経）
※三部経 仏説観無量寿経（観経）
仏説阿弥陀経（小経）
- 【宗祖】 …親鸞聖人
- 【宗祖の主著】 …顕浄土真実教行証文類（教行信証）
- 【宗派名】 …真宗大谷派
- 【本山】 …真宗本廟（東本願寺）

※親鸞聖人の伝記には、不明確な部分が多く、ことがらによっては諸説あるものもあります。本テキストでは、『浄土の真宗』、『親鸞 生涯と教え』、『親鸞聖人伝絵 一御伝鈔に学ぶ一』、『はじめて読む 親鸞聖人のご生涯』（以上、東本願寺出版）、『まんが宗祖親鸞聖人』（難波別院）、『親鸞聖人 御絵伝を読み解く』（法蔵館）を参考にしました。

出遇い



建仁元年（1201）の春、29歳の親鸞聖人は、六角堂での夢告ののち、①_____のおられる吉水の草庵をたずねられました。妻である恵信尼公は、※¹「百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに」(『恵信尼消息』)と、聖人のひたむきな姿を伝えています。

この100日間の聞法をとおして、法然上人の「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」(※²『歎異抄』)という②_____の教えに深く領かれました。この教えこそがすべての人にひらかれている仏道であると確信された聖人は、この大きな感動を※³「愚禿釈の鸞、建仁辛酉の曆、雑行を棄てて③_____に帰す」と主著

である『^{きょうぎょうしんしょう}教行信証』に述べられています。

^{げんきゅう}元久2年(1205)親鸞聖人は、^{せんじゃくほんがん}法然上人の『^{ねんぶつしゅう}選択本願念仏集』の書写と、肖像画をえがくことを許されました。

多くの門弟の中でもそれを許されたのは、わずか数名でした。

このことを^{※4}「この見写を獲るの徒、はなはだもって難し。

しかるに既に製作を書写し、真影を凶画せり。これ専念

正業の徳なり、これ決定往生の徴なり」(『教行信証』)

と記されています。

ここに親鸞聖人は、法然上人の弟子として、念仏の教えに生きていくことを使命とされたのです。

◇補注

※1 (現代語訳)「百日の間、どのような天候であっても、またどんなに大切なことが他にあったとしても、(法然上人のもとに)参られました」

※2 親鸞聖人の法語集と、念仏の教えについての異義を歎く内容で構成される書物。作者は諸説あるが、現在では河和田の唯円が定説となっている。

※3 (現代語訳)「わたくし愚禿釈の鸞は、建仁元年、念仏以外のすべての行を棄てて阿弥陀仏の本願に帰依したのです」

※4 (現代語訳)「この『選択本願念仏集』の書写と、法然上人のお姿を画くことを許された者はごく僅かしかいません。それにもかかわらず、私はすでに書写と肖像画の製作をさせていただきました。これは専修念仏の徳であり、阿弥陀仏の浄土への往生が定まったしるしなのです」

法然上人（1133年生－1212年没）

親鸞聖人が師と仰ぐ法然上人は、美作国の久米（現在の岡山県久米郡）に誕生されました。父・漆間時国うるまのときくには、上人が9歳のときに、敵対していた明石あかしの定明さだあきらの夜襲によって、深い傷を負います。時国は幼い上人に「敵を恨んで仇をとってはならない。出家してすべての人々が平等に救われる道を求めてほしい」と言い残して息を引き取りました。この遺言に従って上人は出家されたと伝えられています。

比叡山で修学を重ねた法然上人は、「智慧第一の法然房」や「一心金剛の戒師」と呼ばれ、人々から高い尊敬を受けていました。しかし、すべての人々が平等に救われる道をどうしても見出すことができず、比叡山の黒谷にある報恩蔵に入り、すべての経典を幾度も読まれました。そして、唐の善導大師が著された『観無量寿経疏』の言葉に出遇われ、「ただ念仏」の教えこそ、真実の道であると確信された上人は、その道を浄土宗として明らかにされました。

専修念仏

念仏には、心に仏の姿を観る念仏（観想念仏）と、口に仏の御名をとなえる念仏（称名念仏）があります。

専修念仏とは、ほかの修行は一切行わずに、ただ専ら「南無阿弥陀仏」と阿弥陀仏の御名をとなえる教えのことです。専修に対して念仏以外の全ての修行を雑修とします。

本願

本願は、仏・菩薩が衆生を救わずにはいられないという大悲の心がもとになっています。

本願の「本」を「因」の意味とするときは、菩薩が因位（仏になる前）におこす誓願のことで、「本」を「根本」の意味とするときは、仏・菩薩が本来の使命としておこした誓願を意味します。

浄土の教えでは、阿弥陀仏の四十八願を本願と称します。また法然上人は、四十八願中の第十八願を「王本願」として、とくに大切にされました。

☆話し合いのポイント例

- 師、先生ってどんな人？
- 印象に残る出会い
- 続けていることはなんですか？

メモ

『御絵伝』について

初幅（第三図）



左図 真心決定

右図 吉水訪問

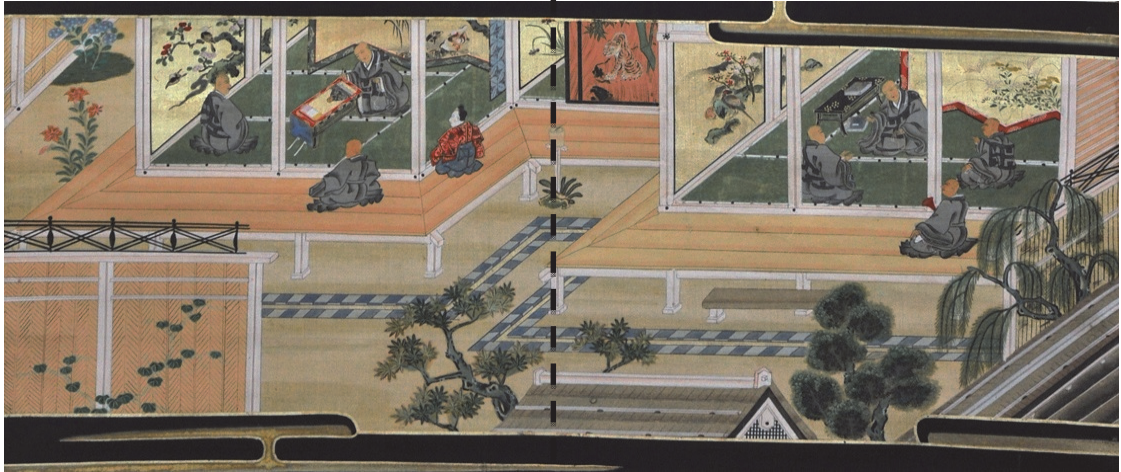
親鸞聖人が生涯の師である法然上人と出会われ、専修念仏を説かれる吉水教団に入室される場面です。

右図では、聖人が吉水の草庵を訪問されています。左側に白い袈裟を着けて立っておられるのが聖人です。六人の従者の中には、幼少時代から共にいる正全房や、流罪にも随行し、関東にも常随した西仏房（乗観房）もいます。

左図では、中央に法然上人、右の白い法衣姿が聖人です。縁に座しているのは善恵房証空（あるいは勢観房）といわれています。池にはオシドリが二羽います（一説には、池に浮かんでいるのが法然上人、岩から池に入ろうとしているのが親鸞聖人だといわれています）。

『御絵伝』について

二幅（第六図）



左図 真影銘文

右図 選択付属

法然上人から『選択本願念仏集』の書写（右図）の許可と、製作された御真影（肖像画）に、本願の要である第十八願のころ（本願加減の文）を上人が書かれている場面です（左図）。両図とも図の中央に法然上人、その正面に座っておられるのが親鸞聖人です。ここでも正全房は両図の縁に座っています。

法然上人はその書写本に「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」、さらに「釈の綽空」と直筆されました。

この図には、法然上人が後世にその教えを伝え残すことを親鸞聖人に託されたという意味があります。

親鸞聖人ゆかりの地紹介

◇安養寺（吉水草庵跡）



そもそもは伝教大師最澄の創建とされています。法然上人は30数年間、ここを本拠地として専修念仏の教えを説かれました。聖人はおよそ6年の間、この吉水の草庵に通い続け、法然上人から教えを聴聞されました。

その後、専修念仏への弾圧で荒廃しましたが、のちに時宗に改めて現在に至ります。同寺の山号慈円山が円山公園の名称のもとになっています。

境内には「吉水」と彫られた古井戸があり、往時が偲ばれます。



所在地／京都市東山区円山町

交通案内／市バス「祇園」下車、徒歩10分

◇岡崎別院



所在地／京都市左京区岡崎東天王町

吉水時代、聖人はこの地に庵を結ばれ、ここから吉水の法然上人のもとへ通われたといわれます。

享和元年（1801）、東本願寺第20代達如上人のとき、現在の本堂が創建されました。また本堂近くの八角の池は、聖人が越後へ流罪されるときに、自身の姿を映して名残りを惜しんだと伝えられ、鏡池とも姿見の池ともいわれています。

交通案内／市バス「岡崎神社前」下車、徒歩1分